

中・高の歴史教育における連携構築に向けた、高等学校における 新科目「歴史総合」の授業構想についての一試案

—地理歴史科授業力向上研究会の成果をもとに—

学校経営支援課 寒川 由美 西村 広志

要 旨

次期（新）高等学校学習指導要領地理歴史科新科目「歴史総合」を見据え、中学校社会科教育からの接続を意識しつつ、現行学習指導要領における生徒の主体的な学びの充実を図るための取組を紹介する。地域の題材を活用し、資料の収集、分析、推察、論証といった生徒の多面的・多角的な歴史的な思考の方法の定着を図るための教科指導力の充実・向上を目的として開催した地理歴史科授業力向上研究会において作成した「単元構想」を紹介し、その成果と課題を考える。

キーワード：「歴史総合」、単元構想、「NIPPON」探究スクール事業、地域教材

I はじめに

平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえて、新中学校学習指導要領が平成29年3月に公示された。高等学校学習指導要領も平成29年度末の改訂が予定されている。この答申において、現行の学習指導要領における成果と課題を基に、育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理され、『『主体的・対話的で深い学び』の実現のためのアクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善の推進が掲げられた。

次期（新）学習指導要領に応じた授業づくりをどのように進めていくかについて、どの教員も頭を悩ませているのが実情であると思われる。本県の高等学校地理歴史科では、鳴門教育大学の梅津正美教授の御指導のもと、平成28年度から「地理歴史科指導力向上研究会」を開催し、次期（新）学習指導要領を見据えつつ、「NIPPON」探究スクール事業^{*1}の成果等を含む地域の題材を活用し、生徒の多面的・多角的な歴史的な思考の方法の定着と向上を図るための教科指導力の充実・向上のための研究を行ってきた。中学校社会科からの接続も踏まえつつ、これまでの取組とこの研究会での成果を紹介することで、授業改善の視点及び授業づくりの基本的な手立てについての理解の一助になると考える。

II 中学校社会科におけるこれまでの取組

新中学校学習指導要領社会科では、育成を目指す資質・能力を踏まえ、「生きて働く、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得」、「社会的な見方・考え方を働かせた思考力、判断力、表現力等の育成」、「主権者として持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」を改訂の基本的な考え方としている。また、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る

ようにすること。」と示されているように、育成を目指す資質・能力は、単元等のまとまりを見通した学びを通して実現できるものである。

本県でも、徳島県中学校教育研究会社会部会において、平成6年度より「未来に生きてはたらく力を育てる社会科学習」を研究主題として設定し、次のような研究仮説のもと、仮説を検証する形で、知識の分類と構造化、育成できる能力に応じた授業の類型化（表1）、年間計画・単元計画の作成、能力を評価するための方略としての単元計画と評価計画の整理など、継続した研究がすすめられてきた。^{*2}

研究仮説

学習課題に対して生徒が思考（判断）した結果として獲得される知識を、構造的にとらえた単元を設定し、計画的・系統的に社会科授業の実践と評価を重ねることで、社会的認識力と社会的判断力を育成することができる。

表1 「問い」と「思考」と「思考の結果獲得される知識」の一体化と授業類型

授業 類型	育成できる能力	問い	思考 （判断）	獲得される 知識
Ⅰ型	社会的認識力	いつ、どこで、誰が、何を、 どのような	事実判断	記述的知識
		なぜか、（結果）どうなるか	解釈・推論	説明的知識
		（地域・時代・社会の本質は） 何か	解釈・推論	概念的知識
Ⅱ型	社会的判断力	よいか（悪いか） 望ましいか（望ましくないか） いかにすべきか	価値判断 意思決定	価値的知識

特に、単元計画については、図1に示すような単元構造図（模式図）を共通のフォームとして取り入れ、研究大会での各分野の発表においても単元の指導と評価の計画とともに示されてきており、単元をまとまりとして捉え、「単元を貫く問い」と獲得できる知識を明確化することの共通理解が図られている。

一方、新学習指導要領で示された「伝統・文化に関する学習の引き継ぎの充実」に向けても、本県では、徳島の伝統や文化について学ぶ、中学生用の学習教材『あわ文化テキストブック』^{*3}とその『教師用指導書』を作成し、想定される対象学年や教科等も例示することで、教育課程に位置付けて実施できるようにしている。社会科を想定し

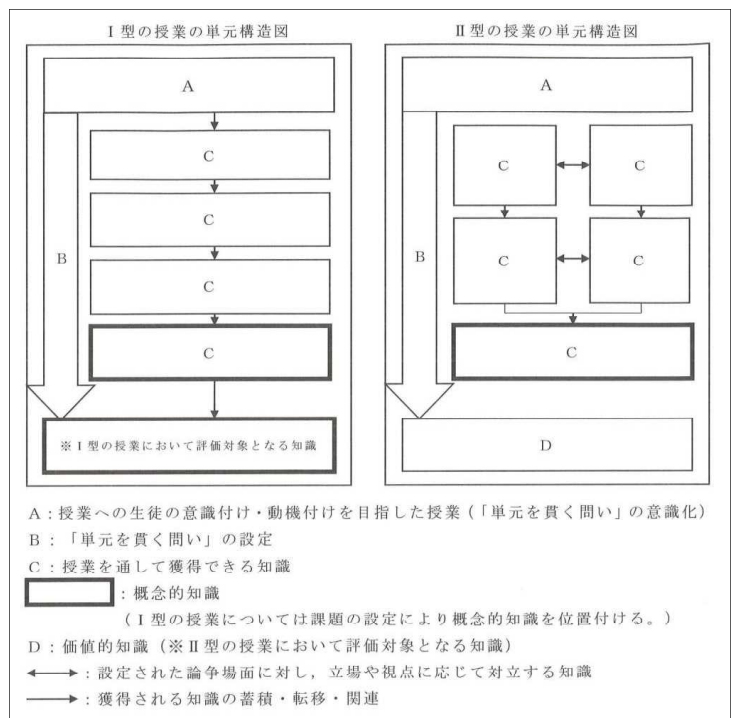


図1 I型、II型の単元構造図（模式図）

た教材も7項目作成されており、「(A) 徳島の伝統と文化を知る。」「(B) 世界や日本の中における徳島の伝統と文化について思考し、公正に判断する。」といった具体的な重点目標とともに地域や生徒の実態に応じて、授業の中で活用できるようになっている。

Ⅲ 高等学校地理歴史科におけるこれまでの取組

1 教育課程研究集会

高等学校地理歴史科においても、単元のまとまりを見通した学習の重要性を意識付けるために、平成26年度以降、教育課程研究集会（地理歴史部会）の事前課題を『『基軸となる問い』と学習内容からなる『単元』構想の事例研究』とし、毎回の授業の改善という視点を超えて、学習内容を単元のまとまりの中で、身に付けさせたい資質・能力と関連付けて構想する機会を設けている。研究集会においては、参加した教員らがグループごとに、各自が提出した事前課題の中から1つの事例を取り上げ、ブラッシュアップしていく作業を行い、「基軸となる問い」(MQ) のたて方や評価の在り方について協議する方式をとっている。

写真1は本年度の研究集会において、世界史グループの1つが検討・発表したものである。現在の城東高校の前身である徳島高等女学校の資料をもとに、朝鮮・満州修学旅行を題材に当時の日本や世界について考察するものとなっている。

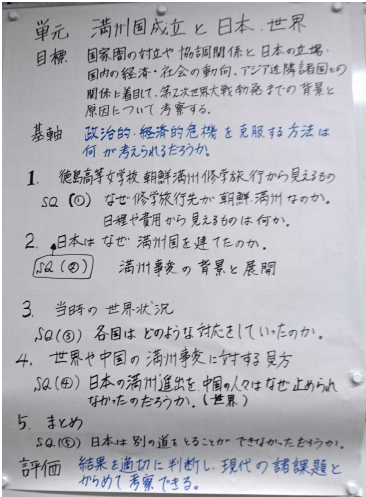


写真1 単元構想の発表例

2 「NIPPON」探究スクール事業

徳島県教育委員会では、平成25年度から、『「NIPPON」探究スクール事業』と題し、主として明治から昭和における歴史を紐解き、各時代における世界の中の「NIPPON」、日本の中の徳島の政治・経済・外交を探究する学校を毎年1校ずつ指定している。指定された学校の生徒が地域でのフィールドワークなど2年間の活動・研究を行った成果は、生徒活動発表会^{*4}などを通じて発信するとともに、研修等で活用することで、地方・日本・世界を結ぶ教材の開発にも役立っている。表2は、これまでに指定された各校の研究テーマである。

表2 「NIPPON」探究スクール事業 指定校と研究テーマ一覧

年度	学校名	研究テーマ
平成25・26年度	城東高校	第一次世界大戦時の外交をテーマに、板東俘虜収容所について探究する。
平成26・27年度	海部高校	江戸後期から昭和初期の洋学者の活動をテーマに、徳島の社会・学問・文化における外交と交流について探究する。
平成27・28年度	池田高校	明治から昭和初期の養蚕・製糸をテーマに、徳島の政治・経済について探究する。
平成28・29年度	那賀高校	農村舞台での人形浄瑠璃公演活動から阿波の政治・経済を探究する。
平成29・30年度	小松島高校	藍商港～今伝えたい小松島の魅力～

IV 「地理歴史科指導力向上研究会」の取組

1 地理歴史科指導力向上研究会について

「地理歴史科指導力向上研究会」は、「NIPPON」探究スクール事業の成果を含む地域の題材を活用した単元の開発を通して教科指導力の充実・向上を図ることを目的に、平成28年7月に各高等学校に募集をかけ、希望した6名の教諭とともに、平成28年9月から平成29年9月までの間に計6回開催した。研究会の概要は表3の通りである。各教諭が、地方、日本、世界を関連付けることのできる題材をもとに、諸課題の時間軸からの考察につながる単元構想案を持ち寄り、検討・協議していく形で研究会をすすめた。また第1回と第4回には、研究会で検討する課題と目標の共有のため、梅津教授に講義をしていただいた。

表3 「地理歴史科指導力向上委員会」の概要

「地理歴史科指導力向上研究会」	
1 趣 旨	次期学習指導要領地理歴史新科目「歴史総合」を見据えつつ、現行学習指導要領における生徒の主体的な学びの充実を図る手立てとして、先述の「NIPPON」探究スクール事業の成果等を含む地域の題材を活用し、資料の収集、分析、推察、論証といった生徒の多角的・多面的で歴史的な思考の方法の定着と向上を図るための教科指導力の充実・向上のため、研究会を開催し、その成果を「単元構想」集としてまとめ、県内で共有を図る。
2 主 催	徳島県教育委員会
3 構 成 員	【 指導・助言・総括 】 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 梅津 正美 【 指導・助言 】 徳島県教育委員会学校教育課 班長 藤川美和 徳島県立総合教育センター学校経営支援課 指導主事 寒川由美 【 出 席 者 】 徳島県立徳島北高等学校 教諭 小川真理子 徳島県立城ノ内高等学校 教諭 岩崎慎司 徳島県立那賀高等学校 教諭 川原 崇 徳島県立海部高等学校 教諭 細岡祥晃 徳島県立海部高等学校 教諭 布川麻衣 徳島県立池田高等学校辻校 教諭 小倉和也

2 授業づくりをどのように進めるか

中教審答申に示された次期（新）学習指導要領の授業改善の視点に基づき、梅津教授より、地理歴史科授業づくりをどのように進めるかについて、まず、新必修科目「歴史総合」を事例に、授業づくりの基本的な手立てとして、次のようなことを示していただいた。

- ① 単元のまとまりとして授業をつくろうとする構え・意識をもつこと。
- ② 時代の特色等に関わる概念的知識（学習内容）と、それに焦点化された事象（典型的な事例）とを設定し、問い（MQ）は焦点化された事象を基に作ること。
- ③ 授業において教授学習する知識を構造化すること。
- ④ 学習過程・方法をアクティブ・ラーニング化すること。具体的には、「歴史的な見方・考え方」を働かせて、学習課題（問い）を見出し、その課題に対して生徒が互いの対話（説明・議論）を通して、主体的に思考・判断（考察・構想）し、課題解決のための知識を習得・活用していくように組織すること。

上記のようなことを考慮にいたした上で、研究会では、持ち寄った単元構想案の教材構成が「主題・問題史学習」となっているかどうか、具体的には、(a)課題の現在性、(b)課題の自己言及性、(c)人間と社会を理解するための視点の多様化、(d)中長期的で多元的な時系列による歴史の考察、などを考慮した単元となっているかどうかについて検討することとした。

3 単元構想案

以下は、研究会での検討をもとに多少修正を加えて再度提出していただいたものから、その一部を抜粋したものである。全ての単元構想案を紹介することはできないため、問いの構造が明確になるよう、単元の指導計画を問いの形で示している。

(1) 単元構想案1 (日本史B)

- 1 単元名：「歴史を論述する～地域から歴史を考え、歴史から地域を考える～」
- 2 単元の目標
身近な地域の歴史を扱った資料を用いて、地域の歴史と教科書に記述されている歴史事象との比較や、その関係性の検討、世界史的背景等について、意見交換やまとめ、討論を行う。これらを周囲と協働して行うことで、幅広い視野を養い、歴史認識を深化する。
- 3 単元の評価規準 (省略)
- 4 単元の指導計画 (全3時間)

基軸となる問い：「地域の歴史からどんなことがわかるだろうか？」

第1次 地域から歴史を考える。(2時間)

- SQ1 学校ができる前、ここには何があったのだろう。
SQ2 なぜ、その施設は設立されたのだろう。なぜ、なくなったのだろう。
SQ3 なぜ、城ノ内高校ができたのだろう。

第2次 歴史から地域を考える。(1時間)

- SQ1 開校当時の城ノ内高校は、どのような学校だったのだろう。
(MQ) 地域の歴史からどんなことがわかるだろうか。(振り返り、まとめる)

5 単元構想案より (第1次の第2時)

次 時 間 扱 い	学 習 活 動	評 価 規 準 等
第1次 (2時間)	①なぜ、その施設は設立されたのだろう。なぜ、なくなったのだろう。 ②なぜ、城ノ内高校ができたのだろう (①と②を教科書・資料から考えよう) ○前回の話し合いの結果をもとに、4つのグループに再編し、再度、意見を深める。 ○グループで模造紙にまとめ発表する。 ○質疑応答を行い、各時代への理解を深める。 ○ワークシートに理解したことや考えたことを記入する。	◎積極的に質疑に参加している。 (行動観察) 【関心・意欲・態度】 ◎理解内容や思考内容が論理立てて書けている。(ワークシート) 【思考・判断・表現】

ワークシート (第1次) より

(4) 下の時代には、ここ (北田宮1丁目) にはどのような施設がありましたか。

①太平洋戦争前

徳島紡績株式会社

②太平洋戦争中

川崎航空機工業株式会社徳島工場

③太平洋戦争後

日本専売公社徳島工場

3. 探求活動

- (1) 上の①～③と城ノ内の開校について、調べてみたいこと (=探求課題) を各班ごとにまとめよう。※国内の政治や経済、国際情勢など (=教科書の記述とつながりがある部分) も出していこう。

●【 】(自分のグループ) について

- ・なぜその施設は設立されたのだろう。なぜなくなったのだろう。
(なぜ、城ノ内が設立されたのだろう)

資料 (「少し丁寧なヒント」) より

①について

- ・昭和7年(1932年)はどんな年だっただろう。(教科書p346)
政治的事件：
経済的状況：
・なぜ工場ができたのだろう。
(当時の日本経済)
(教科書p346, 資料p347)
・原料はどこから用意していたのだろう。
(資料本文, 教科書p348)
・なぜ、工場は閉鎖されたのだろう。
(教科書p355, p359)
・ほかに日本への輸出が制限されたものはあるだろうか。(教科書p360)
・外交関係の悪化のきっかけとなった事件は何か。(教科書pp360-361)

(2) 単元構想案2 (歴史総合)

1 単元名：「戦争と辻の女学生」

2 単元の目標

世界の動向と日本のかかわりを意識させながら、日中戦争と太平洋戦争を辻の女学生（三好高女生）の視点から捉え、影響や関係性を明確にする。また、1920年代から1940年代までの大衆化について、資料に基づいて考察、説明する学習を通して、概念的な知識としての大衆化を理解し、現代における大衆化の課題について自らの考えを持ち、よりよい社会づくりのために貢献しようとする態度を身に付ける。

3 単元の評価規準（省略）

4 単元の指導計画（全6時間）

基軸となる問い：「戦争中、三好高女生（辻の女学生）たちはどのような思いを持っていたのだろう？」

第1次 三好高女生と辻校生の違いと共通点は何だろう？（1時間）

SQ1 三好高女が目指していたものは何だったのか？

SQ2 三好高女生はどのような感覚をもっていたのだろう？

第2次 戦争は三好高女生にどのような変化をもたらしたのか？（1時間）

SQ1 学校で起こった変化は何だろう？

SQ2 三好高女生を戦争に向かわせたものは何だろう？

第3次 戦争と三好高女生にはどのような関係があるのだろう？（2時間）

SQ1 戦争中の考查問題からわかる、三好高女生として身に付けるべきものは何だったのか？

SQ2 三好高女生にとっての戦争とは何だったのだろう？

第4次 つくられた大衆社会の中でどのように生きるべきか？（2時間）

SQ1 これまでの学習を振り返り、まとめてみよう。

SQ2 現代の大衆社会をどのように生きていくか？

sq1 三好高女生たちの多様な考えは、どのようなものだったのか？

sq2 戦時中の三好高女生から何を学び、どのように活かすか？

資料より

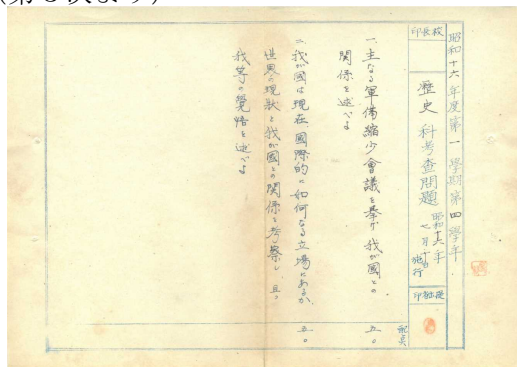
（第1次より） 出典：校誌



授業風景

修学旅行の記 北田千代子、松歌静子、田岡國江
朝食を食べて横須賀軍港に向かって歩くと、軍港の門に着きました。その中の広さと時々みかける兵士たちになんとか、親しみを感じながら一人の案内に連れられて飛行場へと参りました。多くの飛行機を見せられて私達は嬉しく思いました。それよりもっと日本の飛行術の進歩を思い私達も女子としての将来の国民として大きな責任を感じました。
（略）兵士達の船内の働きぶりに私達はただ呆然としてみつめるばかりでした。その分業の発達著しき、そうしてみんな自分の仕事を一心にしている中には黒く油にまみれながら、また、船内にての理髪、菓子屋等いずれもよく国家のために尽くしてくださっているのを見ると、感涙せざるをえませんでした。

（第3次より）



昭和16年度 三好高女の考查問題（歴史）

一、主なる軍備縮小會議を挙げ、我が國との関係を述べよ。

二、我が國は現在、國際的に如何なる立場にあるか、世界の現状と我が國との関係を考察し、且つ我等の覺悟を述べよ。

(3) 単元構想案3 (歴史総合)

1 単元名：「アジア・太平洋戦争のなかの国民」

2 単元の目標

①知識及び技能

- ・資料から有用な情報を読み取ることができる。
- ・太平洋戦争期に国家が示した「国民像」を国民自身が体現したことにより、総力戦体制が実現したことを理解する。

②思考力・判断力・表現力等

- ・国民が戦争に協力した背景について多角的に考察し説明する。
- ・社会規範の意味や意義について考察し、議論する。
- ・多様な価値観をもつ人々との共生を考えるうえでどのような規範を形成すべきかについて考察し、議論し、合意形成を図る。

③学びに向かう力・人間性等

- ・他者の意見を踏まえて、自分の意見を深め、社会形成の主体としての自覚を促す。

3 単元の評価規準 (省略)

4 単元の指導計画 (全4時間)

基軸となる問い：「なぜ人々は戦争遂行に協力したのか？」

第1次 海部高等女学校の生徒たちはどのような思いで学校生活を送っていたのか？ (2時間)

SQ1 校長の手記からわかることは何か？

SQ2 歌にはどのような思いが込められているか？

SQ3 学徒出陣について女学生はどのように捉えていたか？

第2次 戦局の拡大は、海陽町民にどのような影響を与えたか？ (1時間)

SQ1 従軍者数・戦没者数はどのように推移したか？

SQ2 海陽町の戦没者と日本の戦線にはどのような関係があるか？

第3次 国家は海陽町の人々にどのようにして戦争協力を促したか。また、人々はそれをどのように受け止めたか。 (1時間)

SQ1 太平洋戦争下で海陽町民に求められたのはどのようなことか。

SQ2 国民生活の統制のために国家はどのような取組を行ったか。

SQ3 海陽町の人々はなぜ戦争に協力したか。

ワークシート (第1次) より

海部高等女学校校長の手記から女学校生の学校生活を知ろう

【海部高等女学校校長の手記①】

昭和二十年七月七日午前十一時五十七分、浅川の動員先工場にありて爆音をきく。戸外に出てみるに土煙が海部高等女学校の方向に上つてゐる。とにかく、早鐘のなる思いで一生けんめいに自転車をつまみ帰校。短髪信管五百キロ爆弾十一ヶ、学校西方畑中に、千島式に二〇〇米にわたつて落下。直径約十五米、深さ約五米。乃一喜代一氏家屋全壊。隣家半壊十五。即死六、重傷後死亡二、計八、重傷二、軽傷六。周辺六百米の家硝子破壊無数。女学校は西側教室硝子戸内部より外部へ吹き飛ばされ全部破壊。その他硝子戸枠破損数五十枚硝子六百二十五枚コナゴナに粉砕。生徒は全部動員不在のため無事。敵機は学校、病院をねらつた模様。

○いつ書かれたものか？

(昭和20年7月7日)

○日本では〔世界では〕何が起つていたのか？

(第二次世界大戦、太平洋戦争)

○この時、海陽町で何が起つたのか？

(空襲により家屋破壊・死亡者有り)

○この時、海部高等女学校の生徒は何をしていたのか？

(全員動員のため不在)

【1944年4月～11月の海部高等女学校の授業日】

単位：日

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
全出席日	21	30	29	27	12	26	27	22	194
無事故学業の日	5	6	3	3	1	7	9	2	36
正式授業ができなかった日	16	18	26	15	11	16	14	11	127
全員作業動員の日	0	6	0	9	0	3	4	9	31

(4) 単元構想案4 (歴史総合)

1 単元名：「海部高校 (旧三校)・海部郡の歴史と今後の活性化に向けて」

2 単元の目標

(題材) 海部高校〔旧三校〕・海部郡の歴史と今後の活性化に対して、(思考目標) 地域の問題と統廃合の問題には密接に関わりがあったのではないかという歴史的仮定〔見方〕を働かせ、三校の歴史や海部郡の歴史を比較・検討したり、生徒数や諸産業・人口動態等との関連を分析したり、年表・町史・校誌等の資料から問題解決に必要な資料をまとめ活用する学

習を通して、(知識目標) 地域社会の過去・現在・未来の課題を把握・展望し、具体的な解決方法を理解する。

3 単元の評価規準(省略)

4 単元の指導計画(全5時間)

基軸となる問い:「あなたが求める海部高校・海部郡とはどのようなものか、またそれをつくるために今後どのようにしていくか?」

第1時 三校はなぜ統廃合へと進んだのだろうか?

SQ1 三校の歴史はどのようなものだろうか?

SQ2 三校の特徴(PRポイント)はどのようなものだろうか?

SQ3 三校(地元)の課題としてあげられるものは何か?

第2時 県内・郡内の高校生徒数の変化から、社会がどう変わっていったか?

SQ1 県内・郡内の生徒数をグラフにすると何が分かるか?

SQ2 生徒数のグラフと三校の年表を比較すると何が分かるか?

SQ3 生徒数減少の背景・理由はどのようなものが挙げられるか?

第3時 戦後からの海部郡の社会は何をもたらしたか?

SQ1 海部郡は現在までどのように歩んできたか?

SQ2 海部郡の産業・観光・就業・人口等はどのように変遷していったか?

SQ3 海部郡の人口減少の背景・理由はどのようなものが挙げられるか?

第4時 三校の歴史と海部郡の歴史から分かる、今私たちがしなければならないことは何か?

SQ1 三校と海部郡の歴史にはどのような関連性があるか?

SQ2 海部郡や学校の活性化

のために必要なことは何か?

第5時 あなたが求める海部高校・海部郡とはどのようなものか、また、それをつくるために今後どのようにしていくか?

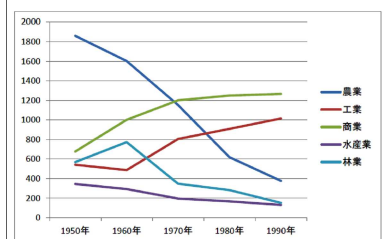
SQ1 海部高校13年の歴史と課題はどのようなものか?

SQ2 現在行われている海部高校・海部郡活性化の動きは何をもたらしたか?

SQ3 私たちの力でどのような社会をつくっていくか?

ワークシートDより

	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年
農業	1860	1802	1152	619	377
工業	541	487	805	909	1015
商業	677	1001	1201	1249	1266
水産業	345	293	196	167	131
林業	569	773	349	282	152



(海南町の就業人口グラフ)

ワークシート(第3時)より

海部郡(海南・海部・穴喰・牟岐・日和佐・由岐)の歴史

戦後から現在まで私たちの住む海部郡の町並みや産業等も大きく様変わりしました。

0. 歴史的仮定の推論

「海部郡内の生徒数の減少と海部郡の歴史には関係性がある。」

では、今日は次の課題を考えていきましょう。

Q 戦後からの海部郡の社会は何をもたらしたか?

みんなで学習しましょう!

グループで協力して必要情報を出し合ひましょう。発表の時は、必ずどう考える理由・論拠を示してください。

1. 海部郡は現在までどのように歩んできたか?

●ポイント1 資料から海部郡の産業・観光・教育・文化等を地域別にまとめてみよう! (別紙 ワークシートA)

2. 海部郡の産業・観光・就業・人口等はどのように変遷していったか?

●ポイント2 海部郡内の各種産業の主な特徴を比較しまとめてみよう! (別紙 ワークシートB)

●ポイント3 海部郡内の人口ピラミッドと就業人口グラフを作成しよう! (別紙 ワークシートC・D)

●ポイント4 産業等の変遷と人口の変化との関係性について考えてみよう! (ワークシートE)

- ・海南地域は農業従事者数が減少、商業・工業従事者数が上昇、しかし総人口は40年で3千人余り減少。
- ・穴喰地域も海南地域と同様だが、人口減少の幅はやや少ない、観光業やサーフィンの影響が。
- ・海部地域は商業中心だが、人口減少の幅が大きい、工業面で海南地域へ流出した。
- ・日和佐地域は農業従事者が激減、商業・工業はやや上昇するも人口が大幅減少、就職などのため阿南以北への転出。
- ・牟岐の人口減少率がかなり激しい、各種従事者も減少しているが、その数に合わず、他地域への転出が大幅に多かったと考えられる。
- ・一時的な豊漁・林業・観光ブームは一時的な人口増加を促す。しかしブームを過ぎると人口は減少する。
- ・海岸公園等、国や県が観光等の指定をすると、観光産業が興い人口が増加している。
- ・結局、もうけがないと他地域へ転出する。産業(働き所)がないと人口は流出する。
- ・人口ピラミッドから、若者の流出・高齢化問題が深刻であることが分かる。とくに1970年ころから深刻。
- ・どの産業も後継者不足が深刻、このままでは人口と産業が途絶えてしまう。
- ・海部郡内は地形等により産業が限定される。そのため就業できる場所や種類も限定されるので人口も減る。
- ・交通面の利便性等により、数例あるが企業誘致は難しい。利便性が高まると逆に人口流出となる可能性。

3. 海部郡の人口減少の背景・理由はどのようなものが挙げられるか?

●ポイント5 人口変化は何によってもたらされたか、いろいろな観点から考えてみよう! (ワークシートF)

- ・各種産業の衰退・町の衰退。
- ・都会への憧れ。
- ・郡内の町の魅力が無い。
- ・働き所ともうけが少ない、豊かな生活ができれば人口は減少しない。
- ・交通の不便。
- ・津波の危険。
- ・産業構造の転換。

(5) 単元構想案5

1 単元名：「阿波藍の未来について考える」

2 単元の目標

徳島県の伝統産業である阿波藍の製造の歴史と現状を把握するとともに、阿波藍を継承するにはどうすればよいか、それは可能なのかを、他地域の地場産業の事例や、阿波藍に係る様々な取組を参考に、意欲的に考察し、よりよい社会の実現を目指して行動できる態度を身に付ける。

3 単元の評価規準（省略）

4 単元の指導計画（全4時間）

基軸となる問い：「阿波藍に“ジャパンプルー”としての未来はあるか？」

第1次 藍はどのようにして徳島を支える重要な産業になっていったのか？（1時間）

第2次 なぜ藍産業は衰退していったのか？（1時間）

第3次 かつて地域を支えた産業の現状を立て直し、再生・発展させていくにはどうすればよいか？（1時間）

SQ1 なぜ今治タオルは現状を立て直し、地域を支える地場産業として再生することができたか？

SQ2 なぜ児島ジーンズは繊維産業の苦境を立て直し、地域を支える地場産業となることができたか？

第4次 阿波藍は伝統産業として生き残ることができるだろうか？（1時間）

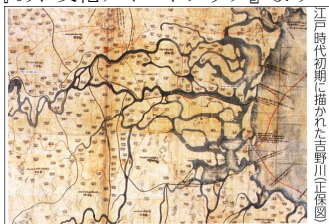
5 単元構想略案より（第1次）

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点			
			関	思	技	知
第1次 (1時間)	MQ 阿波藍に“ジャパンプルー”としての未来はあるか？					
	藍はどのようにして徳島を支える重要な産業になっていったのか？					
	○吉野川の洪水は稲作には不向きだが藍作には肥沃な土壌がもたらされたこと、江戸時代に徳島藩によって藍栽培が推奨されたこと、木綿栽培が普及したことなどを知る。	○様々な要因があることに注目させる。				●

資料より

（第1次より）

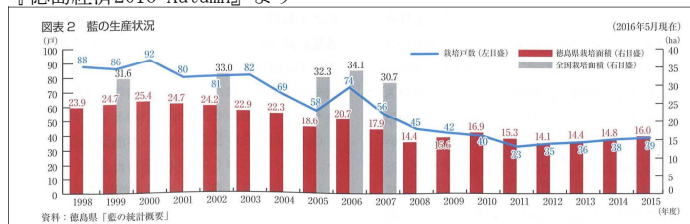
『あわ文化テキストブック』より



江戸時代に描かれた吉野川

（第2次より）

『徳島経済2016 Autumn』より



藍の生産状況

(6) 単元構想案6

1 単元名：「木頭杉の未来は？」

2 単元の目標

本校が立地する那賀町の主要産業である林業の移り変わりを、川上と川下の主導権争いを通して概観し、日本経済の発展の過程を理解する。また、那賀地域の林業の発展には何が必要かを考察し、その未来について議論する。

- 3 単元の評価規準（省略）
4 単元の指導計画（全4時間）

基軸となる問い：木頭杉の未来は？

第1時 江戸時代の木頭はどんな村だったのか？

第2時 近代の木頭の林業はどうだったか？

SQ1 徳島の森林の特徴とは？

SQ2 1892年（明治25）年の大事件とは何か？

SQ3 昭和初期の不況を乗り越えられたのはなぜか？

第3時 戦後の林業はどうなったか？

SQ1 戦後、那賀川地域の林業が変わったのはなぜか？

SQ2 高度経済成長時の林業はどうなったか？

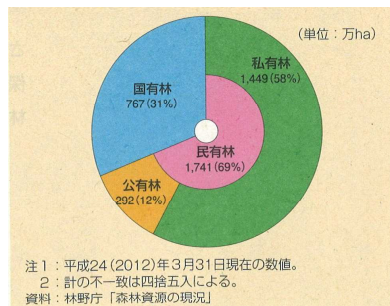
第4時 現在の林業は？

- 5 単元構想案より（第2時）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準
第二時 （1時間扱い）	SQ1 徳島の森林の特徴とは？ ・全国と比べて徳島県は民有林が多いことを理解する。 ・所有者の内訳の資料を見る。	・版籍奉還時に藩有林が民間に払い下げられたことを理解させる。 ・村の上層民と下流の商人が山林のほとんどを所有していたことを理解させる。	・版籍奉還など幕末から明治初期について理解している。（知識・理解） ・明治期になっても、江戸時代とほぼ変わらない状況であること読みとる。（思考・判断・表現）
	SQ2 1892（明治25）年の大事件とは何か？ ・高磯山の崩壊の絵を見て、その後の木頭林業に与えた影響について考察する。	・下流商人の力で復旧が行われた結果、林業全体を下流商人が支配することを理解させる。 ・江戸期以来の社会的経済的基盤の弱さが引き継がれていることを理解させる。	・社会の基盤が脆弱であれば、災害などで一変してしまうことを理解している。（思考・判断・表現）
	SQ3 昭和初期の不況を乗り越えられたのはなぜか？ ・那賀川下流の業者が組合を結成し、独占の様相を強めていくことを理解する。	・那賀川下流の業者が組合を結成し、様々な組織を通じて、木頭材の生産・流送・加工・販売の各過程を握っていったことを理解させる。また、安価な労働力が存在したことを理解させる。	・独占企業について理解している。（知識・理解）

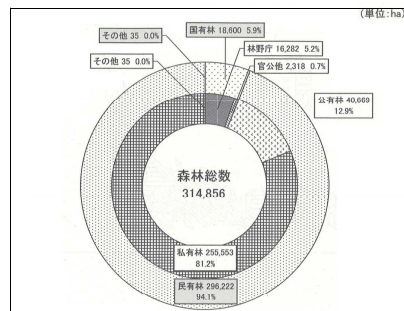
資料より（第2時より）

『平成29年度版森林・林業白書』林野庁より



全国の森林面積の内訳

『平成29年度みどりの要覧〔林業統計〕』徳島県より



徳島県の森林面積の内訳

4 単元構想案の考察

授業の構成としては、中教審答申に示されているように、今後「考察」型と「構想」型のどちらの型を取るかを意識していく必要がある。「考察」型は「なぜ」という問いに対して「思考」し、「説明する」という形をとると組み立てやすい。一方「構想」型は「どうするか」という問いに対して、「判断」し、「議論する」という形をとると組み立てやすい。今回の単元構想案1～3は「考察」型、4～6は「構想」型に分類できる。

単元構想案1は、日本史Bの「歴史の記述」として作成したものであり、生徒が根拠を基に自由な発想で答えることのできる「開かれた問い」となっている。また、例えば「①の工場はなぜ消えたのか？」という問いにすれば、個別的事例を通して1930年代から1940年代前半にかけての政治・経済・人々の生活や意識などについて考察することも可能である。単元構想案2・3は、「歴史総合」の4つの大項目のうち「大衆化と私たち」を念頭に、どちらも市町村史や校誌などを教材とし、大戦期に焦点を当てつつ世界・日本・地域の重層的な関係に着目したものである。今の自分ならどうするか、当時ならどう行動したか、女性と男性、社会階層など様々な角度から考察できるものとなっている。単元構想案4は「グローバル化と私たち」を念頭に、様々な資料から人口や産業などの転換期を読み取り、その背景や理由を歴史的に考察し、持続可能な社会の形成に向けてこれから何ができるかを構想する単元構成となっている。単元構想案5・6は、構想案4と同じく地方の活性化という課題から出発しているが、「近代化と私たち」を念頭に、伝統産業を視野に入れつつ社会構造の変化を考察しながらこれから何ができるかを構想する単元構成となっている。どれも政治・経済・生活・文化などの視点から、世界・中央・地方を関連付け、多面的・多角的に考察することが可能なものとなっている。

V 成果と今後の課題

1 成果

形式の統一や評価規準の吟味までには至らなかったため、どの単元構想案もまだ改善の余地があることはもちろんであるが、単元のまとまりや問いの構造を意識した単元構想案を成果物として示すことができたことが、本研究会の最大の成果である。また、今回作成した単元構想案において用いた地域教材は、各種刊行物や市町村史といった公的なものから、学校が保有・保管している新聞や雑誌、テストや校誌など多岐にわたっており、身近なものが教材となることが確認できた。特に、当該年の地域の様子や当時の生徒が考えていたことを知ることができる校誌については、徳島県は全国的に見ても珍しく、おそらく全ての高校で毎年作成しているものであるため、どの学校においても活用することが可能であると思われる。今回発掘した資料のうち、掲載できるものについては当センターのホームページで掲載し、データベース化することで授業で利用できる教材として共有していきたい。

2 課題

最後に、今後さらに検討していきたい課題をいくつか示しておく。

(1) 資料の吟味

どのような資質・能力を身に付けさせるための資料なのか、資料を通して何を考察させたいのかという視点から、どのような資料を、どのような形で、どのように生徒に提示するかは、これからも絶えず検討していく必要がある。

（２）問いの立て方

今回示したそれぞれの構想案の「基軸となる問い」は必ずしも最善の問いではなく、研究会においても様々な意見が出された。「事例」を通して何を学ばせるのかを意識するようにしなければ、事実的な知識の伝達に終わる。「知識」の部分に偏りすぎないように、育成を目指す三つの柱を意識した問いをさらに模索する必要がある。また、授業の途中で生徒が発した問いをどう拾うかも検討すべきであろう。

（３）歴史教育の連続性

中学校社会科で身に付けた「知識・技能」や「見方・考え方」をどう活かすかによって、高校での授業の組み立て方も変わってくるため、今後さらに連携して研究をすすめていきたい。また、必修科目「歴史総合」とその後に学習する選択科目の「日本史探究」、「世界史探究」をどのように捉え、関連付けていくべきかも検討していきたい。

Ⅵ おわりに

本研究は、学校教育課の藤川美和班長の主導のもとにすすめられてきた取組をもとに、本県の地理歴史科教育のさらなる発展をめざして開催した地理歴史科授業力向上研究会での成果と課題を共有する目的でまとめたものである。本論では作成した単元構想案や資料の一部を紹介したが、平成30年度には可能な限り当センターのホームページから閲覧できるようにする予定であるので、ぜひ本研究を活用していただきたい。また、共有できる教材や指導案のデータベース化も同時にすすめていきたいと考えている。今後各学校で眠っている資料を掘り起こした場合には、当センターにPDFや画像データとして送付していただければ幸いである。

Ⅶ 謝辞

地理歴史科授業力向上研究会の開催にあたり、梅津正美教授（鳴門教育大学）に多大なる御協力をいただきました。また、岩崎慎司教諭（城ノ内高）、小川真理子教諭（徳島北高）、川原 崇教諭（那賀高）、細岡祥晃教諭（海部高）、布川麻衣教諭（海部高）、小倉和也教諭（池田高辻校）の6名には研究会の構成員として単元構想案の作成に尽力していただきました。厚くお礼申し上げます。

*1 徳島県教育委員会が平成25年度から実施、各年度に1校を認定。

*2 第31回徳島県中学校社会科教育研究大会要項4～15頁。

*3 徳島県教育委員会『あわ文化テキストブック』（平成29年3月発行）。

*4 徳島県教育委員会主催、スーパーオンリーワンハイスクール事業の実施校とともに年1回開催。

参考文献

- ・文部科学省「幼稚園、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」、2016年
- ・中学校学習指導要領（平成29年3月公示、文部科学省）
- ・梅津正美「次期学習指導要領改訂における歴史授業改善の方向性と高校日本史教育の課題」、帝国書院『日本史かわら版 第3号（2017年7月発行）』17～19頁。
- ・梅津正美「『歴史総合』の実践課題」、帝国書院『世界史のしおり 2017年度 2学期号』8～9頁。